病　理　部

1　構 成 員

	平成 14 年 3 月 31 日現在
教授	0 人
助教授	1 人
講師（うち病院籍）	0 人　（　人）
助手（うち病院籍）	0 人　（　人）
医員	1 人
研修医	0 人
特別研究員	0 人
大学院学生（うち他講座から）	0 人　（　人）
研究生	0 人
外国人客員研究員	0 人
技官（教務職員を含む）	3 人
その他（技術補佐員等）	5 人
合　　計	10 人

2　教官の異動状況

三浦　克敏（助教授，副部長）（期間中現職）

3　研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 13 年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	3 編　(0 編)
そのインパクトファクターの合計	1.90
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0 編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編　(　編)
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0 編　(　編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	7 編　(5 編)
そのインパクトファクターの合計	2.40
(6) 国際学会発表数	0 編

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Mineta, H., Miura, K., Takebayashi S., Araki, K., Ueda Y., Harada H., and Misawa K. (2001) Immunohistochemical analysis of small cell carcinoma of the head and neck：A report of four patinents and a review of sixteen patients in the literature with ectopic hormone production. Ann Otol Rhinol Laryngol 110：76-82.
2. Gemma, R., Miura, K., Mikami, T., Natsume, H., Nishiyama, K., and Nakamura, H. (2001) Histological changes of thyroid tissues in patients with liver cirrosis. Endocr J 48：535-542.
3. Kazui T, Washiyama N, Muhammad BA, Yamashita K, Takinami M, Miura K. Surgical treatment of annuloaortic ectasia with coronary aneurysm and fistula. Ann Thorac Surg. 2001 Jun；71 (6)：2018-9.

インパクトファクターの小計　［1.903］

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(3) 総　　説

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著　　書

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(5) 症例報告

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Miura, K., Mineta, H., Yokota, N., and Tsutsui, Y. (2001) Olfactory neuroblastoma with epithelial and endocrine differentiation transformed into ganglioneuroma after chemoradiotherapy. Pathol International 51：942-947.
2. 三浦克敏，筒井祥博：顎下腺原発の真性癌肉腫の 1 例．診断病理　18：234-237，2001

インパクトファクターの小計　［0.830］

B．筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 新村裕一郎，三浦克敏，筒井祥博，大端考，横井佳博，赤嶺紀子，大橋弘幸：慢性活動性 EB ウイルス感染症から急激に移行した NK/T 細胞性リンパ腫の 1 剖検例．診断病理　19：76-80，2002
2. 大浦健宏，村井睦彦，田中秀生，鈴木浩之，橋本賢二，三浦克敏：顎下腺原発基底細胞腺癌の 1 例．日本口腔外科学会雑誌　47：297-300，2001
3. Hirashima, K., Kobayashi, H., Nishiguchi, T., Miura, K., and Kanayama, H. (2001) A case of glassy cell carcinoma of the uterine cervix effectively responding to chemotherapy with paclitaxel and carboplatin. Anti-cancer drugs 12：627-630.
4. 平山一久，中村利夫，深沢貴子，大端考，砂山健一，柏原秀史，丸山啓二，今野弘之，三浦克敏，中村達：悪性リンパ腫の化学療法中に発生したサイトメガロウイルス腸炎による回腸穿孔の 1 例．日本消化器病学会雑誌　98：1185-1189，2001
5. Nakamura T, Miura K, Maruo Y, Sunayama K, Maruyama K, Kashiwabara H, Ohata K, Fukuzawa A, Nakamura S. Aggressive angiomyxoma of the perineum originating from the rectal wall. J Gastroenterol. 2002；37 (4)：303-8.

インパクトファクターの小計　［1.570］

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

(6) 国際学会発表

4　特許等の出願状況

	平成 13 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

5　医学研究費取得状況

	平成 13 年度
(1) 文部科学省科学研究費	0 件　（　万円）
(2) 厚生科学研究費	0 件　（　万円）

(3) 他政府機関による研究助成	0件　（　万円）
(4) 財団助成金	0件　（　万円）
(5) 受託研究または共同研究	0件　（　万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	3件　(290万円)

6　特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

7　学会活動

	平成13年度
(1) 特別講演・招待講演回数	0件
(2) 国際・国内シンポジウム発表数	0件
(3) 学会座長回数	3件
(4) 学会開催回数	2件
(5) 学会役員等回数	2件

(3) 座長をした学会名

三浦克敏　城南病理－静岡県病理医会合同集団会　2001年11月，掛川

三浦克敏　第48回日本病理学会中部支部交見会　2001年12月，名古屋

三浦克敏　第194回静岡県病理医会　2002年1月，浜松

(4) 主催する学会名

三浦克敏　静岡県病理医会（SPS）2001年7月

三浦克敏　静岡県病理医会（SPS）2002年1月

(5) 役職についている学会名とその役割

三浦克敏　日本病理学会中部支部　選挙管理委員

三浦克敏　日本病理学会　評議員

8　学術雑誌の編集への貢献

	平成13年度
学術雑誌編集数	0件

9　共同研究の実施状況

	平成13年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	3件

(3) 学内共同研究

耳鼻科との頭頚部腫瘍に関する分子病理研究

泌尿器科との移植と BK ウイルスとの関連に関する研究
第 2 内科との甲状腺の肝硬変や各種疾患時における形態変化についての研究

10　産学共同研究

	平成 13 年度
産学共同研究	1 件

1. 浜松ホトニクスとのテレパソロジーの実用化に関する研究

11　受　　賞（学会賞等）

12　研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 頭頚部領域を原発とした小細胞癌の特徴を耳鼻科との共同研究により報告した。
2. 肝硬変においては甲状腺の線維化や変性がみられ，機能低下を反映した組織像を示すことを第 2 内科との共同研究により報告した。
3. 嗅神経から発生した神経細胞芽腫が化学放射線療法後に神経節細胞腫に変化した稀な症例報告を行なった。
4. 子宮頚部原発のスリガラス細胞癌は治療抵抗性の予後不良な腫瘍であることが知られているが，化学療法が奏効した症例を報告した。

13　この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

1. 浜松ホトニクスとのテレパソロジーの共同研究において，テレパソロジーの実用化に当たり，学内の病理学講座と病理部との間で画像と音声を合わせた遠隔診断をおこなった。ヨーロッパ仕様のシステムであり，国内の他の病院とのテレパソロジーの実用化にはまだ問題点が残るが，病理学講座と病理部との間のテレパソロジーでは，ほぼ支障なくできることが確認できた。

14　研究の独創性，国際性，継続性，応用性

1. 耳鼻科との共同研究により，頭頚部の主たる腫瘍について，遺伝子発現と予後との関連や腫瘍の発症因子について毎年，論文発表を行なっている。頭頚部は環境因子を受けやすく，HPV, EBV などが発癌を誘導することを報告してきた。頭頚部カンファレンスを定期的に行なっており，予後の推測など臨床への応用が期待できる。

15　新聞，雑誌等による報道